

世帯単位の世界システムが、

ひとりへのプレッシャーに

吉田 僕は一九四四年生まれで、ことしで四十七歳になるんですけれども、十年前に関西で「ひとり歩きの会」という会の結成に加わりました。そのことを多少情報としてご存じの方もいらっしゃるかもしれません。ちょうど十年たって、去年、関西で全く別のグループの「確信犯？シングルの会」という会の結成に加わりました。

前のお二人の方は、母子寮の問題、高齢者の問題、どちらかといえば五木田さんの話の中で余儀なくシングルになられた方の問題、これは確かに切実なんです。しかし、時代が少しずつ変わってきました。余儀なくではなくて、私にはひとりの方が向いているという形で選択的にシングルを選んでいく、そういう人が増えて

きはじめて、ちょうど十年ほど前に、それが新しく選択的に生きる生き方が見え始めた時代なんです。そういう時代背景の中で「ひとり歩きの会」というのができるわけです。

その後二、三年たって、海老坂武さんという方が『シングライフ』という本を出されまして、シングルというのが比較的耳ざわりのいい言葉になりましたけれども、十年前だと、ひとり者というのは、やはりまだ半端者になるんですね。僕の田舎は四国ですけれども、四十過ぎるぐらいまで、やはり田舎へ帰ると「そろそろまともに結婚してくれ」と言われていました。僕は実は結婚は二回しているんです。ただ、届け出はしていませんでしたけれども。しかし、やはり二回の中で、どう辛抱しても、どう無理をしても、どう合わせようとしても合わせられなかった二回目のときはほんと疲れ果てまして、僕は結婚に向いていない、向いていない人

間が無理に結婚する必要はないのではないかとかえるようになりました。結構お互い相手も傷つけますので、それで、三十五歳のときに結婚卒業宣言。結婚はやんぴ、向かん人間は向かんでええやんかということを考えているときに、そういうようなことを考える人が二、三人周辺にいまして、「ひとり歩きの会」というのがつくられるわけです。

もちろん「ひとり歩きの会」というのは、そういう人だけではなくて、今話のありました、余儀なくシングルを選ばされた、特に戦争中、あるいは敗戦の混乱期の中でいわゆる結婚適齢期であって、相手の男性が全部戦争で死んじゃったとか、あるいは混乱していて、一生懸命家族を支えている間に三十を超してしまったという方、いわゆる戦争の犠牲者としての結婚できなかった世代というのが、今で言うと六十五歳ぐらいですか、その方々が独身婦人連盟という

のをつくってしまして、戦後、そういう人たちの生活というものを国に対して、私は被害者なんだから、きちっと落としまえつけてくれという運動をかなりしたんですけれども、そういう人たちと一緒にあって、新しいひとり暮らしの権利というものをみんなに訴えていこうという形で、「ひとり歩きの会」というのが十年前にできました。

最初に「ひとり歩きの会」をつくったときの世話人が八人いたわけですけども、どのような反響があるかわからなかったわけですし、やはりまだまだ肩身の狭い生き方をしていますし、僕なんかは田舎へ帰ると、おふくろが、昼間帰ってもらうと困ると。吉田のところの長男は——特に僕は水商売といいますか、喫茶バーテンダーという仕事をしていましたから——結婚したのか、していないのかわからんし、したらしいし、離婚したらしいし、一人で帰ってくると。

だから、帰ってほしいんだけど、帰ってくるなら昼間に帰ってくるな、どうぞ夜中に帰ってくださいと言われていた。十年ほど前はまだそんな時代だったんです。

だから、「ひとり歩きの会」なんかつくったら、石ぶつけられるんじゃないかと思いましたけれども、実は会をつくって新聞に報道されると、ちょうど今のような感じですね、どこからか人がわいてきたかのように、たくさんの方がいらっしやったんです。五回目の集会のときには自立老人ホームをつくらうというので、業者は任せていたのでは十年、二十年先の話になるかわからん、それまでに死んでしまうから、私らだけでひとり者同士、気楽な村をつくりましょうやと。仕事を持っておられる方だったら退職金も多少あるわけだからということで、一人五十万とか百万を集めてという話をしますと、百五十人ぐらい来てしまったんですね。だから、

十年前の切実の度合いというのは、きょうおいでになった皆さんとほとんど同じですね。今だったらまだ、世間に対して、ひとりであるのが何で悪いんやという言い方もできるかもしれない。しかし、十年前は、本当にどこに行ってもいいかわからない。けれども、切実の度合いは非常に強かったんですね。

シングル認知の文化運動を

そういう中で「ひとり歩きの会」というのは、かなり期待される度合いは高かったんですけれども、僕はそのときちょうど三十六歳で、僕はそういう切実な問題も大事なんだけれども、しかし、これをこの中でどうすればいいんだと、個々人の助け合いみたいな形でやっている限り、世の中は変わらんのではないかと。やはりひとりというのは世間から半端者扱いされているから、社会的偏見とか差別があるからこういうの

は再生産されるわけで、少なくとも僕らの世代より後ろの若い世代は、こんな世の中ひっくり返そうじゃないかと。家族者だけが大きな顔をするのはおかしいと。結婚するかしないか、家族を形成するかしないか、これは要は好みの問題だと。好き嫌いの問題、向き不向きやと。結婚していようがしていまいが、同じ人間なんやと。だから、国にしても行政にしても、同じに扱えと。今、日本は扱われていないやないかと。いうことを、少し大げさですけども、文化運動を起こしていけないと、文化的な——その当時、中国の文化大革命が終わって、その後どうなったか知りませんが——文化革命を起こさないとあかんのやと。

ということで、「ひとり歩きの会」の世話人の半数ぐらいは五十代で、あと半数は三十代だったんですが、三十代は文化運動としてやり出したんだけど、いわゆるお手伝い活動がどん

どん増えてしまつて、五年目ぐらいでわれわれは疲れ果てたんです。残念ながらその当時は、百名、二百名集まっても、皆さん世話人の方に、こういうことをやってちょうだいという、そういう要求とか、やってほしい条項をたくさん持つてくるわけです。自分たちはパイプもないわけだし運動の経験もないわけだから、お願いします、お願いしますと。こちら最初は「うん、よし、やらにやいかん」と思いながらも、そればかりだと疲れるんですね。ということで、八人の世話人が、一人抜け、二人抜け、三人抜け、四人抜けて、結局は二人残って今も続いていますけれども、僕の言葉で言いますと、「お任せ型運動」というものの限界の中で疲れ果ててくるんです。

皆さんもきょう集まっていますけれども、間違つてもここに来ている方に、お任せしますからお願いしますよなんて、もうそういう時代で



吉田 清彦さん

はないんです。私はこう思うと思ったら、きょうお話を聞き終わったら、じゃあ、私もやろうと。「私が」です。だれかにお願いではなくて、「私は身近なところでこう思う」という要求を行政に出せばいい、みんなそれぞれが一人ずつ運動を起こしていく時期がもう来ているんですね。それがこの十年の大きな流れだと思います。きょうは、よし悪しは別ですが、これは新聞の報道のされ方によって、たまたまこういうことになったことだと思えますけれども、平均年齢をざっとお伺いすると、恐らく四十七、八歳から五十歳くらいになるのかもしれない。

「ひとり歩きの会」の十年前のときには、会を開くたびに年齢が上がってしまうんです。というのは、三十代、四十代はいろいろな運動の経験があるし、運動の場があるんですね。ところが、十年前の五十代、六十代、七十代というのは場がないんです。だから、「ひとり歩きの会」というのがあると、そこへ行けばひとり暮らしの問題は全部聞いてくれるとなれば、みんな来ますね。そうすると、平均年齢がどんどん上がってしまう。例会をするたびに三歳ぐらい上がってしまいうですね。だから、結局、僕は五年目で抜けたんですけれども、四年目か五年目のときの平均年齢は六十代になった。きょうは恐らく十年前と同じような状況の方もたくさんいらっしゃると思うんです。

しかし十年たって、去年の暮れから今年にかけて「確信犯？シングルの会」というのがつくられました。「確信犯？シングルの会」は、実は

平均年齢は三十四、五歳です。かなり状況が変わってきています。なぜ「確信犯？シングルの会」というのは、三十代平均の新しい会になれたかということです。十年前の「ひとり歩きの会」と「確信犯？シングルの会」との違いを僕なりに整理してみますと、一つは未婚の男女の平均年齢がどんどん上がってきている。昔、女性の場合は結婚適齢期というプレッシャーがありましたから、大体二十三歳の後半ぐらいからばたばた結婚するんですね。だから、クリスマスケーキという言葉があったように、二十四日を超えてしまうと全然価値がなくなると言われましたけれども、つい最近のデータでは、女性の初婚年齢は二十五・八歳まで来ていますね。このズレはものすごく大きいわけですし、女性の場合でも、二十代後半から三十代後半で結婚していない人が結構多いんですね。

もう一つは、僕が男性だから言うわけではあ

りませんけれども、男性の平均初婚年齢もどんどん遅くなっているんですね。今恐らく平均しますと二十八・五歳ぐらいですか。つい最近の新聞を見ますと、男性の場合、三十代前半の未婚率は二八・一%、男でも三十五歳まで結婚していないのが三人に一人ぐらいいる。東京都だと四〇%にも達するんですね。これは結婚できない男が増えているということもありますけれども、結婚は別に急がなくてもいいという世代が結構いると思うんです。だから、同じシングルでもいろいろな幅があるわけですから、そこでもいろいろな運動のスタイルもあるだろうし、どういう方向に持っていくかというのいろいろあると思いますけれども、だから、シングルをひとまとめにできる時代ではもうなくなってきているような気がします。そのほか経済的な問題とか、いろいろありますけれども。では、どういうシングルがあるのかということを、シ

シングル十数年の経験の中から簡単に、少しおもしろおかしく分類していきます。

シングルにもパターンはいろいろ

十年ほど前に、結婚しない男性が増えているという話の中で、ひとまとめに結婚していない、いわゆる未婚男性といっても、三つのパターンに大きく分けられるということを自分なりの言葉で表現してみました。

まず「結婚拒否型」。結婚なんかしなくてもいい、意思をもって結婚をしない拒否型。次に「結婚通過型」。何かうっかりして結婚しそびれてしまった。これを片仮名でモラトリウムと言いますけれども、ずるずると結婚しない人がどんどん増えてきてしまったんですね。もう一つ、「結婚不安型」というがあります。これは、おれは結婚なんかできるのかなという、結婚することに非常に不安を持ち始めた男性がその数年前か

ら増えてきていたんです。いわゆる母子密着の中で、お母さん以外の女性と自分からコンタクトをとれないんです。お母さん以外の女性に対して具体的イメージを結べない。そういう一種のマザコン男性が結婚できなくなる。これも社会的に非常に大きな問題です。最近では女性でもそうなんです。親と密着しすぎて、親が非常に理想的なモデルになった。それ以外の異性が非常に頼りなくなつて、結婚できない。

以上の三つに分けたんですけれども、実はしかしこの三つ以上にいろいろありまして、そういう中で、現時点で整理してみますと、七、八年前に増えてきた「拒否型」は、私たちが去年つくりました「確信犯？シングルの会」型で、確信を持ってシングルで生きていく。しかし、サークルとしては「確信犯シングルの会」にすると何か犯罪者に思われるということで、「確信犯？シングルの会」ということで、確信犯でな

くても、ちょっとその考えもあるという人もいらっしやいということで「？」をつけたんです。それに、やはり漢字ばかりでは男の言葉だから、平仮名を使いましょうという人が僕らのサークルの中にいまして、ではいろいろ考えたわけです。運動というのは固い字でやっても仕方がないですから、楽しくやろうということで、その確信犯を平仮名で「のびのびシングル」、あるいは「いきいきシングル」と呼ぼうではないかと。だから、僕らは一応、「いきいき？シングル」の会」というわけです。

それから、「通過型」、「モラトリアム型」をわかりやすく言えば「なりゆきシングル」あるいは「うっかりシングル」、「気がつけばシングル」。これが数としては一番多いですね。「とりあえずシングル」とも言います。それを二つに分けますと、「うっかり型」と「ちゃっかり型」。「ちゃっかり型」というのは、シングルのほうが楽だ、

気楽だ、親もいるしと、もう、ちゃっかりなんです。うっかりとちゃっかりは違うんですね。

「うっかり型」というのは、何となくという形で、気がつけばかなり焦るんですけれども、「ちゃっかり型」は、お父さん、お母さんが生きているうちは、ちゃっかりのほうがいいじゃないか、という形ですね。今、東京で非常に男女のシングルが多いのは「ちゃっかり型」なんです。これは結構トレーニングと言われて、カッコいいやないかと。今型ですね。この「ちゃっかり型」は七、八年前にはなかったんですが、これを、ある専門家は「家庭内単身者」と呼んでいるんですね。いわゆる親との家庭を形成しているけれども、意識はシングルという。僕らの会にはそんなものは寄せてやらんと思うぐらいに都合のいいやつですけれども、しかし、具体的に生活する中でいろいろ問題が見えてきますから、「ちゃっかり型」でも別にいいと思います。

「うっかり型」にしろ「ちゃっかり型」にしろ、それは実は五年先、十年先を考えると、いずれそのうち結婚をするという、“結婚予備軍”が恐らく八割ぐらいです。今は「ちゃっかり型」「うっかり型」でシングルなんだけど、結局やはり結婚を否定はしていません。結婚というものは肯定しているんですね。しかし、あと一割か二割ぐらいは、できればこのままずっとシングルでもいいなあと言う。だから、前者の「いずれそのうち」というのを「結婚予備軍」とすれば、後者の「できればこのままずっとでもいいな」というのは、確信犯シングルの予備軍ですね。

それから、「結婚不安型」は、いわゆる親子関係が密着しすぎて、あるいは親子関係だけではなくて、今は子供の数が少ないですから、人間関係のモデルが非常に少ない中で、自分が育った家族の中では人間関係を持てるけれども、家

族以外の人間と関係を持てない。同性であれ、異性であれ、特に異性と。そういう中で結婚なんかできないんです。そういう人たちが増えてきていますので、いわゆる結婚できないシングル、彼ら、彼女たち——きょう来ていたらごめんなさいね——には悪いけれども、これは「やっかいシングル」なんです。当人も自分自身を持て余していると思いますけれども、やはり生活しやすい環境から自分自身が飛び出せない。だから、自分がその密着関係から飛び出すんだというところからいかないと、これはもうだれか人が救えるわけではない。やっかいですけれども、これはかなり増えています。もちろん親に責任があります。

それから、この三つの中には言及されてなくて、高齢者の中に一番多いのは、先ほど話が出たように「余儀なくシングル」ですね、「やむなくシングル」とも言います。これを三つに分け

ますと、一つは、先ほど僕がちょっと言いました独婦連という、時代の制約をもらに受けたシングル。もう一つは、シングルになるつもりはなかったんだけど、途中でシングルにされてしまった「死別シングル」。パートナーが死んでしまった、これも結構多いんですね。それに対して日本の制度というのは、死別の場合は、とりあえずは面倒を見てあげよう。ところが、もう一つ、「離婚シングル」に対しては世間は非常に冷たいですね。新聞などでも投書には「勝手に離婚したんやから、路頭に迷おうが、そんなの自分の勝手やんか」という言い方をされます。これから考えると、要は家族を形成しているなら面倒を見てやろう。家族を形成していないやつは面倒を見てやらんというのが、日本の連綿たる伝統になっている。その中で意識がつけられてくるわけです。

ということ、ひとり暮らしの生きにくさ

たいなものは僕は骨身にしみていますけれども、年齢をどんどん超えてしまうと、死んだ後のことを考えると、お墓のことでも、今、一人だとなかなかお墓も選択できない。当人の意思というのは無視されるんですね。おれは灰にして海に捨てて欲しいと言っても、当人がそういう意思を持っていても、残された人間の、いわゆる墓守——墓守なんて戦前の言葉ですが、それがまだ生きているんですね——のほうに行政なりが押しつけて、いろいろ制約がある。だから、勝手に死ねないんですね。僕なんかは寺の長男なんですけれども、かなり昔から醒めた目を持つていますから、死んだ後はどうなってもかまわんと。灰にされようが、どこの墓に入れられようが、おれはかまわん。要は残された人間が生きやすいようであればいいと。そのぐらしか僕は考えていないんですね。しかし、やっぱり私は死んだら絶対実家に入りたくないとか、

あるいは婚家に入りたくないとか、それはたくさんあるでしょう。しかし、死んでしまったらええやんかと思えますけどね。

それは別としても、新聞などをよく見ていまして、「独居老人、孤独に死亡。死後十日間で発見される」とかあるんです。独居老人が死んだのは事実ですよ。しかし、孤独に死んだのか、ニコニコ笑いながら死んだのかわかるまいしね。それに、家族に見取られて死んだからといって、その胸の中、心の中が孤独でなかったか、寂しくなかったかわかるものではないでしょう。僕のおやじは二年前に死にましたけれども、おふくろに二年ぐらい、もう本当におふくろが先に死ぬんじゃないかと思うような看病をさせましたけれども、死んでいくときに彼は非常に孤独に死んでいったはずなんです、いろいろあつて。だから、家族に見取られたからといって孤独ではないというわけでもない。

そういう中で、ひとりであるということはいろいろなプレッシャーがあるわけですが、根っこは何かということですね。皆さん、そこを考えて、根っここのことをきちっとしないと、いくら行政に物を申してみたって、同じことはどんどん後から再生される。ということで、根っこは何かというと、今、社会保障の充実だとか、いろいろ言っていますけれども、今の日本の社会システムの単位が、要は夫婦とか家族という、世帯を単位にされているんですね。日本は、戦後、民主主義になっても残念ながら個人が単位になっていないんです。それがもうすべての諸悪の根源です。

“生きる単位は個人”の発想へ

そういう中から、ここ四、五年の一番の問題と思うのは、専業主婦控除とか、パート課税限度額を九十万から百何万にするとか、それは絶



対おかしいわけです。結論だけ先に言いますと、皆さん、扶養手当をもらっている方もいらつしやる、払っている方もいらつしやるかもしれませんが、せんけれども、ある人が別の人に対して扶養されるというのは、そもそもどこおかしいわけです、扶養手当をなくそうではないかということ。僕は言いたいわけです。そうすると、今扶養手当をもらっていることによってなりたっている人は困ると言うけれども、しかし、扶養手当があるから扶養される側に回るわけで、もし扶養手当をなくしたら、みんなどこかではい上がりないとしようがないんですね。そういうように根本的に発想を変えないと、パート課税限度額を九十万から百万にしようと百五万にしようと、ダメ。もうええやんか、パート減税やめよう、ゼロにしよう。とすれば、最低二百五十万以上働かんと生活できんぐらいの世の中になるんです。パートで百万ぐらいというのはおかし

いから、パートも二百五十万出せという気を起こせばいいんです。そういうふうに根本的に発想を変えないといけない。

根つこのところは、世の中を生きていく基本の単位は世帯ではない、家族でもない、個人だというふうに、世の中を変えていく運動、意識というものを持たないと、すべてのいろいろな問題というのは、臭いものにふたというか、モグラたたきに終わってしまう。基本はひとりだということ、いろいろこれから老いも若きもみんな、物を申ししていきましょう。(拍手)

金谷 ありがとうございます。シングルが非常に増えてくるということは、それだけ選挙権もあるわけですし、なんなら代議士さんの中でシングルの人に投票しようとか。だって、扶養家族をいっぱい持っている人が扶養控除をなくすわけではないんですよ。そうでしょう。それから、自分の年金保険料だけで女房が基礎年金